

大地の恵み——機能性成分で需要が拡大 ハスカップ

美唄市ハスカップ生産組合（北海道美唄市・JAびばい管内）



地域の新たな特産品とするため、市とJAが連携し、昭和 57 年に生産組合を発足。近年は機能性成分が注目を浴び、需要が拡大している。

指先ほどの大きさで、色は深い紫、楕円形をした小果樹のハスカップ。アントシアニンなどの機能成分が多く含まれることから注目され、ハスカップを使ったスイーツの人気の高まりと相まって、需要が伸びている。

石狩平野の中央部に位置する美唄市は、北海道でも有数のハスカップ産地である。6月中旬、JAびばいの試験圃場では紫色に熟したハスカップの収穫が始まっていた。

緩やかな丘陵地帯に広がる圃場には、1,500本ほどのハスカップが整然と並ぶ。作業しているのは、障害者の就労や生活を支援する、地域の社会福祉法人「北海道光生会」の皆さん。色づいた果実を探し、軽くひねるようにして摘み取る。手間がかかり、根気のいる仕事だ。

試験圃場での栽培は4年前からスタート。市が仲立ちし、収穫期に人手がほしいJAと、就労準備に向けた仕事を求める社会福祉法人が協力し、農福連携事業として取り組んできた。JAはこの圃場で、粒が大きく、適度な酸味のあるハスカップの選抜・育成にも挑戦している。



「農家に一本」で生産拡大をめざす

アイヌ語で「枝の上にたくさんなるもの」を意味するハスカップは、スイカズラ科の落葉低木で、シベリアのバイカル湖付近が原産地。北海道では、湿原や高山帯などに自生し、飲料にしたり保存食にしたりするなど、人々の生活に根づいてきた。

昭和50年ごろ、稲作専業地域だった美唄市に減反の波が押し寄せていた。そこで複合経営によって生産者の生活の安定を図るべく、ハスカップの産地づくりが始まった。

その一つが、57年に発足した美唄市ハスカップ生産組合の取り組みだ。市とJAが音頭をとり、「新しい特産物に！」と栽培農家を募集。17戸、約8haの面積をまとめ、安定した農業経営に向けスタートを切った。

今では栽培面積10ha、組合員は68人と、裾野が広がった。1戸あたり10a前後で栽培する人が



▲「美唄市ハスカップ生産組合」の皆さん

る人もいます。ハスカップは需要が多く、仕事の張りあいがあります」

と、猪俣さん。組合では、^{せんてい}剪定の講習会や生産者会議を開催するほか、2年に一度、道内の産地である^{あつま}厚真町や千歳市などを視察する。栽培上のポイントは、雪害や春先の強風に対処する
かだという。

^{ふるのゆたか}古野豊さん(71)は、ハスカップ栽培歴が20年近くになる。農閑期に収穫できることに魅力を感じ、一粒一粒をだいじに出荷してきた。

「美唄は雪が多いので、木が痛めつけられると辛い気持ちになるね。だから、ていねいに冬囲いをします」



▲ハスカップ商品の数々

多く、平成30年は、JAへの集荷量を25tと見込む。

生産組合長の猪俣康資さん(54)は、水稻やコムギ、ダイズなどを柱に、ハスカップを20aの規模で生産する。父はハスカップ栽培の草分け的存在で、20歳で就農したときには、栽培に取り組んでいた。

「摘みながら食べるのが一番おいしいんですよ。組合員の中にはジャムや果実酒を作ったり、塩漬けしておにぎりに入れたりす

多くはJAから製菓メーカーに通年出荷される。地元にある(株)ホリの工場ではゼリーや果汁ソース、苫小牧市の(株)三星では北海道銘菓「よいとまけ」に加工。美唄市内のAコープでは通年、冷凍ハスカップを販売している。JAと生産組合は、より多くの農家で栽培する構想を描く。猪俣さんが力を込めてこう話す。

「ハスカップは手間がかかるため大規模な生産は難しい。だから一戸の農家につき一本でもいいから栽培してもらいたい。そうやって生産者を増やして、ハスカップを美唄の特産品として発信していきたいですね」